

「道徳教育に対する読書の意義—19世紀・20世紀転換期のドイツにおける「傾向論争」に着目して—」

基礎教育学コース 吉 本 篤 子

The significance of reading for moral education: Focusing on arguments about 'tendentious literature' at the end of the 19th century and early 20th century in Germany

Atsuko YOSHIMOTO

This study examines the controversy about children's literature at the end of the 19th century and early 20th century in Germany. It focuses on primary school teacher Heinrich Wolgast and other educators who criticized literature for children with patriotic, religious or moral tendencies ('children's tendentious literature'), as well as on the arguments of their critics. Wolgast and his colleagues were opposed to such literature because they believed that an important educational aim for children in primary school was the development of 'Genußfähigkeit' (a sense of aesthetic appreciation), and that these kind of stories interfered with it. Arguing that children couldn't acquire morality before building 'Genußfähigkeit', they tried to reverse the trend toward children's tendentious literature. On the other hand, those who supported this literature considered moral education as a means of inculcating moral precepts. The arguments of the two sides show the differences in the way they thought about morality and moral education through reading.

目 次

1. 問題設定
 - 1.1. 問題関心
 - 1.2. 研究史概観
 - 1.3. 参考資料
2. 対立の構造
 - 2.1. 論争の経緯
 - 2.2. 「傾向」概念議論が示すもの
 - 2.3. 教員組合内部での対立・見解の相違
3. 読書による道徳形成に関する思想的基盤
 - 3.1. 子どもの固有の子どもらしさについて
 - 3.2. 享受能力形成について
 - 3.3. 道徳の育成のための基盤
4. おわりに

1. 問題設定

1.1. 問題関心

本論文は、19世紀・20世紀の転換期のドイツにおける読書教育をめぐる議論のうち、いわゆる「傾向（文学）論争」をめぐる議論を中心にとりあげる。「傾向文学」とは、どのような傾向であれ、宗教的、道徳的、あるいは愛国主義的な意図をもって書かれた文学

を指す。当時の児童書をめぐって、この傾向（文学）を批判して大きな論争にまで発展させた当事者が、ドイツの民衆学校教員ハインリヒ・ヴォルガストや、民衆学校教員組合員で構成された児童書検定委員会（以下「児童書委員会」と略記）¹⁾であった。この「傾向論争」は1890年代から第一次世界大戦前まで継続し、とりわけハンプルクを中心に行われた文学教育運動、「ハンプルク運動」がその中心であった〔Wilkending 1982: 83〕。傾向文学をはじめとして、児童書委員会らが批判した娯楽文学など、子どもにとって望ましくない本を規制しようとする動きは、一方では児童書のカノン化を進行させる契機となり、他方では児童に何らかの「傾向」を説く人々や「傾向」を重視していた人々からの激しい反発を呼び起こした。

「傾向」論争に関連する議論を取りあげる理由について説明しておきたい。この議論はドイツの国語教育や読書教育におけるカノン作成、または児童文学教育の問題として注目されてきた〔Kümmelung-Meibauer 2003, Wilkending 1980〕。傾向論争は、ヴォルガストの読書教育論を理論的基盤とした、民衆学校教員らによる当時の児童文学への批判と、それに対する宗教関連団体や愛国主義的団体、書籍業者などの対立構造として研究され、ドイツでは世紀転換期に初めて問題化さ

れた児童の私的読書や「何を読むべきか」という課題についての議論の一環である、と理解されている [Wilkending 1980, Ewers 1996]。筆者も基本的にはその見解を引き継ぎながら、傾向論争を「道德教育に対する読書の意義」という観点から検討し、傾向を批判した人々と彼らと対立関係にあった人々がそれぞれいかに道德形成を理解していたのかを明らかにしたい。

ヴォルガストら傾向批判をする教員たちは児童の傾向文学を批判していたこともあって、しばしば「宗教乃至国家敵対的」であり、道德を追放する者としても批判を浴びてきた。彼らは、道德に対して批判的であり子どもの道德教育を脅かす存在だと考えられていた。しかし、ヴォルガストらの傾向批判は、道德教育を追放する意図でなされたわけではない。ともに子どもの道德形成を重視しているにもかかわらず傾向批判者とその敵対者が対立しているのは、道德を形成するにはどのような読書が必要か、そして「何を読ませるか」をめぐるものであった。

こうして、両者の「道德」理解が異なっているのではないかという、本論文の第一の問いが成立する。この問いを考えるうえで重要なのが、両者において道德形成の契機とその形成過程がいかに理解されているか、である。筆者はすでに別稿においても、ヴォルガストの傾向文学批判についても検討した [吉本 2011]。そこで、彼は読書による児童の芸術的享受能力形成を何よりも優先していたために、当時その市場に流通していた傾向文学や娯楽文学を批判したことを確認した。本論文は、ヴォルガストにおける享受能力形成の意味を別稿とはやや違った視点から検討する試みでもある。

「傾向論争」においてももう一つ注目すべきは「傾向」概念の複雑さである。それゆえ、論争当事者が「傾向」概念によって批判しようとしていたもの、乃至擁護しようと思っていたものが何かを明確に整理する必要がある。これが本論文の二つめの問いである。本稿では児童書委員会内部でも傾向議論において見解の相違や論争が見られたことを確認したうえで、論争当事者間の問題意識のずれを検討し、それが読書による道德形成（道德教育）の理解の相違にも関係していることを、それぞれの思想的基盤にたちかえて明らかにしたい。

1.2. 研究史概観

「傾向文学」批判は、ヴォルガストの読書教育論の基本的特徴の一つである。エーヴァースは、ヴォルガ

ストの傾向批判が多大な影響をもったことを認めつつも、その傾向批判の規準が曖昧で無意味であると否定的評価を下している [Ewers 1996]。ヴィルケンディングは、ヴォルガストやとりわけハンプルクの児童書委員会による反「傾向」の鋭い批判が様々な批判を浴び、さらに委員会内での見解の相違が原因となり、後退していったと論じている [Wilkending 1980]。

本論文は、ヴォルガストが傾向論争の中で傾向に対して曖昧乃至妥協的な態度をとったという批判に対して、基本的に反対の立場をとる。その理由は、以下に述べるように「傾向」概念自体の複雑さのため傾向批判の規準が曖昧に見えるためであり、また、傾向批判が後退したという理解については、基本的には傾向議論で妥協したというよりも、傾向概念の議論を精緻化させた結果と考えるためである。

1.3. 参考資料

ここで、本論文で検討する三つの系列の資料について述べておきたい。まず愛国協会 [Patriotische Gesellschaft]²⁾ と児童書委員会との論争を示す資料である。本論文では、1899年の愛国協会とハンプルク児童書委員会との論争のきっかけとなった資料を取り上げる。教員組合同様、愛国協会にも児童書委員会がおかれていた。Hamburger Nachrichten紙に掲載された「愛国協会の児童書委員会によって作成された、ハンプルクにおける児童書問題についての覚書」 [Patriotische Gesellschaft 1899, 以下PG1899と略記] [“*Denkschrift über die Frage der Jugendschriften in Hamburg*”, 以下「覚書」と略記] と、それに対する反論「愛国協会の児童書委員会の覚書に対するハンプルク児童書委員会の返答」 [Borstel 1899] [“*Erwidern der Hamburger Jugendschriften-Ausschusses auf die Denkschrift der Jugendschriften-Kommission der Patriotischen Gesellschaft*”, 以下「返答」と略記] である。

次にハンプルク教員組合の機関紙 “Pädagogische Zeitung” 上で傾向概念をめぐる展開された、J.J.シュールとヴォルガストの論争資料、「我が国の児童文学の惨状」 [Scheel 1906] と「児童書における傾向」 [Wolgast 1906a, 以下TJと略記] である。

そして、「傾向文学」批判が最もまとまった形で展開されているヴォルガストの著『我が国の児童文学の惨状』 [Wolgast 1911 (= 1896), 以下EJと略記] [“*Das Elend unserer Jugendliteratur*”, 以後「惨状」と略記] やミュンヘン教員組合大会での講演「児童書における宗教的なものと愛国主義的なもの」 [Wolgast 1906b,

以下RPと略記]『Das Religiöse und Patriotische in der Jugendschrift』, 1902年にケムニッツ教員大会での講演『教育に対する芸術の意義』[Wolgast 1903, 以下BKと略記]『Die Bedeutung der Kunst für die Erziehung』を中心に取り上げる。

本論文では主として1889年から1906年頃までの議論を取り扱う。この時期ヴォルガストが積極的に傾向論争に参加していたことと、以下に述べるように1906年のミュンヘン教員会議で、傾向に関する教員組合での判断原則が決定したことがその理由である。

2. 「傾向論争」の構造

2.1. 論争の経緯

傾向論争は、基本的にはヴォルガストや民衆学校教員組合で組織された児童書委員会と、彼らを批判する様々な組織によって行われた。児童書委員会は機関紙『児童書の守護者』[『Jugendschriften-Warte』, 以下『守護者』と略記]を中心として、いくつかの原則³⁾を主張したが、その理論的な基礎を与えたのがヴォルガストの著作であった。本論文では委員会の原則のうち、「傾向」文学批判と、それをめぐる論争についてとりあげることによって、道德教育に対する読書の意義を考察したい。

ヴォルガストは、すでに1892年に「固有の児童文学」、すなわち児童向けに書かれた児童文学に含まれる「傾向」への疑念を表明していた[Wolkending 1980: 222]が、1896年になると『惨状』で本格的な傾向文学批判に着手した。ヴォルガストらは文学作品における政治的、道德的、宗教的傾向を批判したため、多方面から批判を浴び、それに応答することによって傾向論争が始まった。彼らの批判者は、以下のように大別することができる。

①教会関係団体

傾向論争は、1899年の愛国協会との論争により、まずその最初の高潮期を迎える[Wolkending 2003: 250]が、その1年前の1898年、バイエルンのカトリック教会の文学指南書が、「『児童書の守護者』よ、私は、お前が子どもから体系的に信念と道德を奪い取るために手をさしのべることを、改めて非難する。」[RP: 24, 下線は筆者、以下同じ]と批判しており、そこで既に『守護者』と児童書委員会は、文学書から宗教や道德を追放することによって、児童に対し宗教的、道德的に悪影響を及ぼすと批判されていた。

②市民団体

愛国的な心情を理由に傾向批判に反論した人々の代表的な集団が、ハンブルクの市民団体、愛国協会である。愛国協会は「覚書」において、教員組合が1897年のクリスマス用に作成した推薦書のリストを批判した。それに対して、児童書委員会は同年、委員長のポーステル⁴⁾による「返答」を出版する。「返答」は、内容上ヴォルガストの著作を論拠とした反批判になっている⁵⁾。ハンブルクの有力市民団体⁶⁾と児童書委員会の論争であるため、ハンブルク内に限定された論争のように思われるかもしれないが、ハンブルク児童書委員会はドイツ児童書運動の中心的存在であり、大きな影響力をもっていた⁷⁾点を考慮すれば、決してそうではなかったことは明らかである。

③書籍市場関係者

書籍市場関係者も、経済的利害から傾向批判に反発した。1898年にはハンブルク—アルトナ書籍商連合が委員会を批判する記事を掲載し[Hellmann 1898], 1903年には「Börsenblatt」紙に、19の出版社や小売店などが連名で委員会に対する異議を發表した。

ヴォルガストと児童書委員会が多方面から批判にさらされたのは、彼らの傾向文学批判と推薦書リスト化が大きな影響を与えたためでもあった。当時の児童書市場において傾向書や娯楽書が迎え入れられていることに危機感をもっていた委員会は、多数のリストを作成・配布しただけでなく、毎年クリスマスには親が子どもにどのような本を贈ったのか調査し、個々の学校からデータを集めて自分たちの推薦書がどのぐらい含まれていたのかを確認までした⁸⁾[Stoll 1905: 215]。フリードリヒ・ランゲ⁹⁾は、そうした調査が当然両親の本の選定に影響を与えると批判している[Lange 1899]。

これら三つの系列の批判に共通しているのは、児童書委員会とヴォルガストの理論が宗教や国家に敵対的で子どもから道德を奪うものであるという見解である。こうした批判に対して彼らはどのように対応したのかを、いくつかの論争に即して見ておきたい。

2.2. 「傾向」概念をめぐる議論

まず愛国協会との論争がある。愛国協会も激しい調子で児童書委員会を宗教や祖国に敵対的であると批判している。しかし、それに対する委員会の「返答」は、真っ向からの反論ではなく、両者の議論はすれ違っている。厳しい批判が寄せられているにも関わらず、会長のポーステルは、委員会と愛国協会では「少

なくない箇所では我々の原則と同意見が表明されて」おり、児童書委員会と愛国協会の児童書委員会の今後の協調が可能になると主張している [Borstel 1899 : 5]。一方で彼は、愛国協会が児童書委員会を誤解しており、ヴォルガストは祖国愛や宗教といった目的を危険にすることはなく、知的、道徳的要素として芸術的なものに対する教育を認めるべきだ、と反論している [Borstel 1899 : 18] が、論点は深められていない。

次に、フリードリヒ・ランゲ主宰の“Deutsche Zeitung”紙の記事を見てみよう。ランゲは、児童書委員会がハンプルクの社会民主主義者とともに社会民主党の側に立って活動していると述べている [Lange 1899]。ランゲらの批判と児童書委員会の応答のいずれもが、論争当事者たちが互いに相手を特定の思想傾向や「政治的」動機から議論していると同じ批判をぶつけあっている。

「口実にされた美的関心の背後に」児童書委員会は宗教と祖国愛の傾向 [PG 1899] を隠しているという愛国協会からの厳しい批判を、ヴォルガストは否定する [RP : 27]。しかし愛国協会にとっては、芸術作品を「気質」ととらえたゾラを擁護した委員会が、同時に「宗教的気質あるいはドイツ愛国主義的気質」を排除し、またデ・アミーチスの『クオーレ』のような愛国的な文学作品を、ドイツ以外の国の作品に限定して擁護することが恣意的に見えたのであろう。

こうした論争の流れを見ると、たがいに政治的傾向（社会主義的傾向や愛国主義的傾向）をもっているために批判しあっている単なるイデオロギー闘争と見ることもできるが、この論争はそれにとどまるものではない。これほどまでにヴォルガストや教員組合が社会民主主義的（宗教と祖国に敵対的）であると批判された理由の一つに、当時、社会民主主義者たちがヴォルガストの著作や児童書委員会の運動を「政治的」意図をもって支持していたことが挙げられよう。実際、教員組合員には党に所属していた者も多く、また、その頃、“Vorwärts”紙や“Neue Zeit”誌といった社会民主党のメディアにおいて『惨状』の書評や委員会の原則に対する積極的な評価が載ったことも、社会民主党とのつながりを一層感じさせる理由になったことは間違いない。また、ヴォルガスト自身が『惨状』の中でマルクスに依拠している箇所があることや [EJ : 3]、彼自身の発言¹⁰⁾のために、たびたび社会民主党とのつながりを疑われたことも事実である。

このように、「傾向」批判に対する反論が曖昧であったり、論争がたびたび互いのイデオロギー批判に

終始したのは、以下検討するように、「傾向」概念の多義性と、傾向の種類がイデオロギーに回収されがちな特性をもっている点にその理由があるように思われる。また、「傾向」概念の多義性ゆえに、傾向書の読書の（道徳教育に対する）影響についても多様な解釈の余地を残すことになる。

2.3. 教員組合内部での対立・見解の相違

委員会内でも「傾向」の理解に対立や相違があり、なかでもハンプルクとミュンヘンの児童書委員会の対立は重大であった。1899年、バイエルン教員組合の代表者は、地元ミュンヘン出身の道徳的児童文学作家クリストフ・フォン・シュミート¹¹⁾に対するヴォルガストや児童書委員会の批判に対して抗議し、同年ニュルンベルクではバイエルン教員新聞での『守護者』の添付が中止された¹²⁾。

これらの内部対立への対処として、二つの展開が見られた。

一つは、1899年末にミュンヘン児童書委員会で行われたヴォルガストの講演「宗教的なものと愛国的なもの」である。ここでヴォルガストは委員会内部で傾向論争から生じた亀裂を解消しようと試みた。彼は、文芸作品の重要性を説明し、その際重要な文学が「国民固有の文学」「国民文学」だと述べる。宗教的・愛国的傾向をもつ書物を読まなくても芸術作品としての国民らしい文学の読書によって子どもに祖国愛を伝えることができると述べて、傾向批判が祖国や宗教に敵対的になるものではないという考えを明らかにしている [RP : 51]。言い換えれば、ヴォルガストにとって国民文学は芸術作品としての条件を満たし、かつその読書によって愛国心を養うことのできるような文学でもあった。しかし、たとえばその中にエミール・ゾラやゴットフリート・ケラーの作品が含まれているように、必ずしも彼が挙げている国民文学はドイツのものに限定されていないことから、彼の批判者は到底納得できなかったであろう。

二つめの展開は、以下の三つの「傾向」の判断原則が確定した、1906年のミュンヘン教員会議である。

①「本来の傾向書」の承認

文芸芸術によって理念を描写しようという衝動という意味での傾向は、「本来の傾向」あるいは「正しい傾向」であると考えられ、文芸的創造にとって不可欠である。

②宗教的、道徳的、愛国主義的書物の部分的承認

宗教的、道徳的、愛国主義的影響をもたらすような

文学であっても、「芸術的構成の法則」をもつものについては、児童読み物として無条件に推薦すべきである。

③「偽の傾向書」の拒否

芸術的享受の「素朴さ」を破壊し、文芸作品の価値判断のための誤った規準を確定するような傾向をもつ書物は、子どもから遠ざけねばならない [JSW 1906, Wilkending 1980 : 223]。

この決議によって、基本的には委員会の見解は統一されたことになる¹³⁾。この原則の特徴は、傾向を「正しい傾向」と「偽の傾向」に区分したことと、「芸術的構成」をもつという条件をもつ限りで傾向文学を認めたことにある。

「傾向」を認めようという動きが内部から生じていたことを示すのが、ヴォルガストとJ.J.シェール¹⁴⁾との“Pädagogische Reform”紙上でのやりとりである。同紙1906年第12号で、シェールは、『惨状』第三版の出版を機に新たに『惨状』の書評を執筆し、ヴォルガストは第16号でそれへの応答を寄せている。「文芸的形式の児童書は芸術作品でなければならない」というヴォルガストの原則を支持する点で二人は共通しているが、「傾向」理解は異なっている。シェールは、傾向のない文学はない、つまり、あらゆる文学者は自分の意見をもって作品世界を構成しているのだから、作者の意図すなわち傾向が現れないはずがない、という根本的な疑問を呈示する [Scheel 1906]。

これに対しヴォルガストは、児童書において傾向を認めるという点で自分の考えがシェールと同じ考えである、と認める。しばしばヴォルガストはあらゆる傾向を否定していると誤解され、否定されただけに、シェールの書評はヴォルガストの重要な主張を引き出したと言えよう。ヴォルガストが拒否するのは、「煽動的傾向」である [TJ]。つまり、「傾向が元来アジテーションの性格を帯びたときに、その場合に初めて芸術的傾向は危険になる」 [Borstel 1899 : 19]。一方で、シェールが認める「傾向」とは、宗教的教訓や政治的主張が直接あらわれるような「傾向」ではなく、「芸術作品において具体化された理念あるいは雰囲気」 [TJ] である。ヴォルガストの用語で言えば、「傾向」という「素材」をそれにふさわしい「形式」に組み込むことであろう [吉本 2011]。容認する傾向と拒否する傾向を「正しい傾向」と「偽の傾向」に区分するヴォルガストからみれば、シェールが「正しい傾向」と「偽の傾向」を混同しているために、見解の相違が生じた。こうしてヴォルガストと児童書委員会は、傾向の

多義性を認めることによって部分的に批判者の議論をとりいれることになったのである¹⁵⁾。

このようなヴォルガストの対応は、絶対的な傾向批判から一見後退したように見えるが、その背景には、二つの重要な視点があるように思われる。それが次に検討する「子どもの固有の子どもらしさ」と「享受能力の形成」である。

3. 読書による道徳形成に関する思想的基盤

自らの取り組みを「強制的美学ではなく、芸術作品そのものにおける芸術享受のための教育である」 [Borstel 1899 : 11] と位置づけていたように、当時の芸術教育運動にかかわる民衆学校教員たちは、児童の享受能力形成を最も重視し、そのための教育を要求したが、「覚書」などで批判されることになる。そこで問題とされたのが「子どもの固有の子どもらしさ」という概念であった。

3.1. 子どもの固有の子どもらしさについて

「覚書」にはこうある。「児童書委員会が望んでいるような強制的美学 [Zwangsästhetik]¹⁶⁾ は、[...] 子どもの中の固有の子どもらしさを危険にさらす」 [PG 1899]。愛国協会によれば、子どもは芸術享受のような高度な能力をもてないのだから、12歳から14歳¹⁷⁾ の子どもにそれを要求することが既に間違っている。

この「子どもらしさ」という概念は、児童書委員会や芸術教育運動の中でも、重視されていた。しかし、論争当事者において既に「子どもらしさ」の理解が異なっている。傾向擁護者たちの考える「子どもらしさ」は享受能力を必要としないので、ヴォルガストの批判するような、「素材」の面白さや刺激の強さに目を奪われてしまう読書も肯定されることになる。

ここでヴォルガストがなぜ傾向文学を批判したのかを改めて確認したい。ヴォルガストは『惨状』において児童書と道徳との関係を論じながら傾向文学を批判している。彼によれば「現実感覚は、すなわち、あるがままの状況に十分に取り組み、その状況の特徴にある種の喜びを感じる能力は、非常に注目すべき道徳的側面をもっている」 [EJ : 52]。なぜなら現実感覚をもつ者は先入観から生まれる一面的な見方に抵抗できるのに対し、傾向書は、子どもの現実感覚、つまり「真実に対する感覚と、あるがままに生を直接把握しようと努力する誠実さ」 [EJ : 53] を骨抜きにし、減ぼしてしまうからである。

こうした議論から、ヴォルガストにとって道德とはある特定の定められた規範ではなく、現実を見て真実であるか否かを判断しようとする感覚である、と理解できよう。彼が批判するような傾向文学の読書では、著者がことばやイメージにおいて表現するものすべてに道德的判断を添えているので、子どもはこの観点から見るのに慣れてしまう。つまり、大人が判断する道德的な特徴を子どもに注入する点に問題があるとヴォルガストは考えている [EJ: 54]。

ここで、「傾向批判」を批判し、享受能力の形成を不要あるいは不可能だと考えている人々が、読書による道德規範の形成をどう理解していたかが明らかになる。彼らは、傾向文学を読んで、素材から大人の教えたい道德規範を直接的に読みとるような道德形成過程を想定している。そうして得た道德規範を遵守するような子どもが、彼らにとっての「子どもらしい」子どもであった。

民衆学校教員らの「子どもらしさ」理解については紙数の関係上、ごく簡単に述べる程度にとどめたい¹⁸⁾。ヴォルガストにとって享受能力の形成は子どもらしさと矛盾するものではなく、子どもらしい読書の方法をたもちながら、年齢段階的に読書の素材を發展させることによって享受能力を發展させていく過程が考えられている [Wolgast 1906c: 1ff.]。

こうして、「子どもの固有の子どもらしさ」を理由に傾向批判に反対する人々は、読書による道德形成の際、素材に含まれる道德規範を子どもに注入するような形の読書によって道德形成が行われるという過程を想定しているということが、明らかになる。

3.2. 享受能力形成について

プロテスタントの教員エルラーは“Pädagogisches Monatsblatt”誌でヴォルガストの傾向批判を批判し、「形式美に対する生まれつきの理解」は大半の人間に欠けているし、生まれつき人間が不平等であると述べている [Erler 1899]。このようにエルラーは、ほとんどの人間が文芸作品の享受能力を形成できていないとして、ヴォルガストの民衆層のための享受能力形成論を批判している。

民衆層の児童には享受能力形成が不可能であると考えていたのは、もちろんエルラーだけではない。愛国協会も「多数の民衆学校の生徒を文学的に判断力があるようにすることができると考えているなら、たしかに、ハンプルク検定委員会 [= 児童書委員会、筆者注] は間違っている」[PG 1899] と述べている。や

はりここでも、民衆層の子どもに文学的判断力、つまり享受能力を形成することは不可能だと考えられている。また、民衆学校の読書教育において芸術作品としての児童書を要求することは、教育学的に誤っているとみなされてきた [Borstel 1899: 7]。

こうした見解に反対する民衆学校教員たちは「教育を受けた家庭の子どもと教育を受けていない家庭の子どもとの理解力の相違」を、「一般的な民衆学校の立場から、原則的に認めない」[PG 1899]として、エルラーのような立場を否定する。ヴォルガストらが「傾向」を批判したのは、それが享受能力の形成を阻害すると考えていたためであり、彼らは、享受能力の形成を一部の人々、つまり「教養人」[Borstel 1899: 8]のみに期待することに異論を唱えた。

次に、なぜヴォルガストは傾向をもつ文学が享受能力の形成を阻害すると考えたのかを、具体的な作品に即して見てみたい。講演「児童書における宗教的なものと愛国的なもの」の中で、ヴォルガストは具体的に悪い「傾向」文学の例としてシュミートの『タンネンブルクのローザ』[“*Rosa von Tannenburg*”, 以下『ローザ』と略記]を取り上げ、違いを際立たせるために、芸術作品としての文学の例として、同様に宗教の重要性を叙述しているローゼッガー¹⁹⁾の『いかにしてマイセン・ゼップは死んだのか』[“*Wie der Meisen-Sepp gestorben ist*”, 以下『ゼップ』と略記]を比較検討している。

ヴォルガストは、死の床にある母親が娘に向かって宗教の重要性を滔々と語る『ローザ』の一場面と、同じく死に近づいている敬虔な夫ゼップが妻子と引き離されて死ぬ『ゼップ』の場面を対照的に語る。一方は「教訓を与え、勧告しよう」としているが、他方は「ただ描写しようとしている」[RP: 38ff.]。

彼は言う。「ある種の子どもたちや教育を受けていない大人」は、享受能力を有していないため、詩や物語から教訓や勧告すなわち「傾向」を感じ取らないと満たされない [TJ]。つまり、傾向文学を読んでいると、傾向が強ければ強いほどその文学を良いと感じるようになり、傾向が弱い文学の良さがわからなくなる。つまり、文学＝傾向と考えるようになり、傾向に還元されない文学の独自性を理解できなくなる。傾向文学を読み慣れた読者にとっては、『ローザ』の母親が死の直前、現実的には考えられないほど不自然に信仰の大切さを語るのも、宗教的傾向が強いため良い文学と感じられ、『ゼップ』のように控えめな叙述の方はかすんで見えてしまう。一方ヴォルガストにとっ

て、「ためらいなく創作し、自分でみたように世界を叙述する」物語が良い作品であり、反対に「型通りに描き」、「形象を配置すべきところで説得しようとする」、あるいは「特定の教訓的考えあるいは心情を読者に薦め、もしくは示唆する」ような物語が悪い作品であった[TJ]。後者こそがヴォルガストの考える「偽の傾向」である。シュミートに代表される「傾向書」は、あらゆるページで宗教と愛国主義を説教し、物語の全体が全てその意図のもとに構成されている[RP: 43ff.]。

ヴォルガストは道德教育と読書の関係あるいは享受能力の形成との関係をどう理解しているのか。既に述べたように、芸術作品としての文学作品の読書によって現実感覚が形成され、道德も育成されと考えられている。他方で、彼によれば読書教育は広義の芸術教育の一環に位置づけられ、読書教育によって形成される文学的享受能力は芸術教育の基本である[EJ: 41]。芸術が教育の知的側面と道德的側面に重要な影響を与える[BK: 22]とみなすヴォルガストは、当時行われていた読本による道德教育において、芸術が「道德的享受」の添え物もしくは手段とされていたことを批判している[BK: 10]。芸術享受能力形成のための教育が子どもの道德形成に効果をもつ[BK: 15]と考えるヴォルガストにとって、享受能力形成のための教育は道德教育と密接に関連していた。とはいえ彼は、道德教育のための芸術教育についても当然批判的である。

さらに「道德的教育と芸術教育が同じ根から成長し」、その根は「真実さに対する目の教育であり、現実感覚の教育」[Ausbildung des Wirklichkeitssinnes][BK: 19]であると述べられていることから、彼にとって道德的教育と芸術教育が「現実感覚の教育」、つまり享受能力の育成を共通の根にもつことが明らかになる。

これまでの議論をまとめよう。ヴォルガストや傾向批判者たちにとって、読書やその他の芸術教育により育成される享受能力は、道德教育を促進するために必要不可欠な能力だった。彼らは享受能力の形成を抜きにした、道德教育のための読書を批判した。享受能力が形成され、現実感覚を身につけることを、道德的教訓の注入よりも重視したのである。こうした考えからヴォルガストらは一部の者のための享受能力の形成という見方には同意せず、民衆層を含めた全ての国民のために不可欠な教育として、道德教育と並んで享受能力の育成を位置づけていた。

これに対し、傾向批判の批判者たちは、享受能力の形成には高度な能力が必要なので民衆層には教育不可能であると考えており、彼らが想定していた道德は、育成された享受能力や現実感覚をもちいて善悪を判断するようなヴォルガスト的の道德観とは異なっていた。

3.3. 道德育成のための基盤

「傾向」とは、「特定の傾向を説得しようとする作者の意図」であった。それがヴォルガストらによって良い意図と悪い意図に分けられているわけだが、彼らも認めるように、そうした意図は、それが分かり易い限りにおいて、読者に直接的に影響を与えやすかった。

傾向擁護者にとって道德とは、たとえば信仰心や愛国心といったものであり、これらを児童書の素材から読みとることが重要だった。だからこそ、素材に頼ることを否定し、素材にふさわしい形式を与えようとするヴォルガストらの見解は「道德に敵対的」に思えた。「ハンブルク児童書委員会によって要求された広がりにおいて文学的享受への教育を行うと、[…]祖国愛や宗教愛のような、他のより高度な教育目標を危うくする」[PG 1899]と述べ、彼らは文学享受より祖国愛や宗教愛といった道德規範を優先するが、他方でヴォルガストは「芸術教育は知的教育や道德的教育と同じ権利をもっている」[BK: 22]だけでなく、文学的享受があつてこそ、道德規範が形成されと考えていた。

ヴォルガストにおける読書と道德教育の関係をさらに見ていこう。彼は「子どもの本の重点は、宗教的もしくは道德的あるいは愛国主義的素材の中にある」[RP: 26]とみなし、当時の児童書が素材を強調するあまり、本来重要な形式と素材の調和を無視していることを批判した。これに対しヴォルガストの敵対者は、愛国心や信仰心といった、既に定着している伝統的な道德規範を重視していた。ヴォルガストの考える道德は、物事の判断や現実認識などを深める力をもつものであり、特定の道德規範を理解して実際にそれを守るといった種類のものとは異なっている。いわば、原理的な基礎としての道德規範であると言えよう。そうした道德規範は、彼にとって、読書を通じて形成される享受能力をまって初めて獲得できるはずであった。

4. おわりに

傾向論争がイデオロギー的な論争にとどまらないの

は、こうした道徳理解の違いも大きな対立理由になっているからである。実際、ある作品が「ふさわしい形式に織り込まれている」か否かを判断することは難しく²⁰⁾、「正しい傾向文学」と「偽の傾向文学」の区別も曖昧にならざるをえない点で、ヴォルガストラが展開した傾向文学批判の議論は批判を避けることができなかった。

「返答」で述べられているとおり、傾向論争をめぐる享受能力形成の問題は「全ドイツの教員層にとって一つの前提という意味をもつ、全般的な民衆学校の可能性」[Borstel 1899: 15]の問題であり、世紀転換期のドイツの民衆にとっての読書教育や道徳教育にかかわる論点を提示する問題であった。

また、実際的な道徳教育の観点からこの論争について考えると、予め大人が考える道徳規範を全く教えずに教育することは難しい。その意味では、本論文はヴォルガストラの議論を主題にしているが、享受能力の形成と道徳を関連づけて考えていたヴォルガストラの方が優れているというわけでも、また、現実感覚や享受能力といった道徳規範の基礎を軽視する傾向支持者の方が優れているというわけでもない。まさに、現在の道徳教育で考えられているような、原理的道徳と慣習的道徳の二つの道徳がここで示され、それぞれの道徳観の相違が読書による道徳教育についての考えにも影響をもたらしていると言えるのではないだろうか。

(指導教員 今井康雄教授)

文 献

一次文献

- Wolgast, Heinrich. [1892]: Die literarische Bildung der Volksmassen. In: *Die Gegenwart* 42. 1892, S. 117-119, 137-140.
- 一. [1911 (= 1896)]: *Das Elend unserer Jugendliteratur*. Verlag Ernst Wunderlich, Leipzig.
- 一. [1898]: Privatlektüre. In: W. Rein (Hrsg.): *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*. Bd6, Beyer, Langensalza. S.342-355.
- 一. [1903]: *Die Bedeutung der Kunst für die Erziehung*. Verlag von Ernst Wunderlich.
- 一. [1906a]: Die Tendenz in der Jugendschrift. In: *Pädagogische Reform* Nr. 16.
- 一. [1906b]: Das Religiöse und Patriotische in der Jugendschrift. In: *Vom Kinderbuch* [1906c]. *Gesammelte Aufsätze von Heinrich Wolgast*. Verlag von B. G. Teubner, Leipzig und Berlin.
- Borstel, Fritz von. [1899]: *Erwiderung der Hamburger Jugendschriften-Ausschusses auf die Denkschrift der Jugendschriften-Kommission der Patriotischen Gesellschaft*. Buchdruckerei von S.G.Carstens,

Altona.

- Erler, J. [1899]: Darf dir dichterische Jugendlektüre nur litterarisch-ästhetisch gewertet werden. In: *Pädagogisches Monatsblatt* 6.
- Hellmann, C.A. [1898]: Der Hamburg-Altonaer Buchhändler Verein und die Reform der Jugendlektüre. In: *Pädagogische Reform* Nr.39.
- Lange, Friedrich. [1899]: Eroberungsversuche der Sozialdemokratie in der Volksschule. In: *Deutsche Zeitung*, 22. September, 1899.
- Patriotische Gesellschaft. [1899]: Denkschrift über die Frage der Jugendschriften in Hamburg, ausgearbeitet von der Jugendschriften Kommission der Patriotischen Gesellschaft. In: *Hamburger Nachrichten*. 22. März 1899.
- Scheel, J.J. [1906]: Das Elend unserer Jugendliteratur. In: *Pädagogische Reform* 1906, Nr.12.
- [1903] Jugendschriften Kritik. In: *Börsenblatt für den deutschen Buchhandel* 70. 1903, S. 5595-5596.
- [1906]: Das Protokoll der Generalversammlung der vereinigten deutschen Prüfungsausschüsse für Jugendschriften in München. In: *Jugendschriften-Warte* (= JSW) 14, Nr.7.

二次文献

- 吉本篤子 [2011]: ハインリヒ・ヴォルガストの児童文学批判——世紀転換期ドイツにおける読書教育をめぐる——『研究室紀要』第37号, 67-79頁。
- Ewers, Hans-Heino. [1996]: Eine folgenreiche, aber fragwürdige Verurteilung aller "spezifischen Jugendliteratur". In: Dolle-Weinkauff, Bernd., Ewers, Hans-Heino(Hg.). *Theorien der Jugendlektüre*. Juventa Verlag Weinheim und München.
- Jenkins, Jennifer. [2003]: *Provincial Modernity*. Cornell University Press.
- Kümmelung-Meibauer, Bettina. [2003]: *Kinderliteratur, Kanonbildung und literarische Wertung*. Verlag J.B. Metzler Stuttgart Weimar.
- Stoll, Hermann. [1905]: *Geschichte der Gesellschaft der Freunde des vaterländischen Schul- und Erziehungswesens in Hamburg*. Festschrift zur Hundertjahrfeier. Hamburg.
- Wilkending, Gisela. [1979]: Heinrich Joachim Wolgast. In: Doderer, Klaus(hg.). *Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur*, Bd.3, Weinheim, S.825-827.
- 一. [1980]: *Volksbildung und Pädagogik' vom Kinde aus*". Beltz Verlag, Weinheim und Basel.
- 一. [1982]: *Lieteraturpädagogik in der Kaiserzeit*. Ferdinand Schöningh. Paderborn.
- 一. [2001]: Die Kommerzialisierung der Jugendliteratur. In: Kaspar Maase und Wolfgang Kaschuba (Hg.). *Schund und Schönheit*, Böhlau Verlag, Weimar, S. 218-251.

注

- 1) 該当する語として、Jugendschriftenausschuß, Prüfungsausschuße für Jugendschriften などの語があるが、本論文では訳語を「児童書委員会」に統一する。ハンブルクの児童書委員会は、1888年にハンブルク民衆学校教員組合内で設立された。1893年、ハンブルクを含めた11の地方の児童書委員会が統一ドイツ児童書検定委員会連合として、ベルリンを中心都市として統合され、同

- 時に組合機関紙『児童書の守護者』[“Jugendschriften- Warte”] が創設される。1896年にはハンブルクが中心都市になる。
- 2) 1765年に創設されたハンブルクの文化団体 [吉本 2011, 註6]。
 - 3) 委員会の最大の原則が、『惨状』で最も良く知られた一文「文芸的形式の児童書は芸術作品でなければならない」である。その原則にもとづき委員会やヴォルガストは、当時の児童向けの傾向文学や娯楽文学を批判した [吉本 2011]。
 - 4) Fritz von Borstel (1867–1924). 1895–1897年, 1889–1900年の委員会代表。
 - 5) 一例として「我々が「ヴォルガストの原則と一致している」と主張されるとき、我々は完全にそのことを了承している」 [Borstel 1899: 4]。
 - 6) ジェンキンスの研究は、ハンブルクにおける愛国協会の結果とした文化的役割の大きさを示している。ハンブルクのような有力な貴族がいない都市国家には芸術のための中心的な文化官僚あるいはあらゆる政府による芸術のためのサポートが欠如しており、ハンブルク最大の中産階級団体であった愛国協会が市民文化促進のために積極的な役割を担っており、リヒトヴァルクによって「自発的な文化省」と呼ばれていた [Jenkins 2003: 41]。また「返答」でも同様の見解が示されている [Borstel 1899: 4]。
 - 7) ハンブルクが1896年に中心都市に選ばれたのは、ドイツの大部分においてハンブルク児童書委員会による指導や委員会の見解が了承された証拠である、とシュトールは述べており [Stoll 1905: 214]、委員会内での差異に着目するヴィルケンディングの見解とは異なる [Wilkending 1980: 226ff.]。
 - 8) 委員会作成のクリスマス推薦書リストのハンブルクでの配布部数は、40000部 (1896年)、65000部 (1899年)、86000部 (1902年)、110000部 (1904年) [Stoll 1905: 212]。
 - 9) Lange, Friedrich (1851–1917). 植民政策、艦隊政策に積極的なジャーナリスト [Wilkending 1980: 70ff.]。
 - 10) ヴォルガストは1898年の読本委員会で「私は社会主義鎮圧法に署名した」人物を「褒め讃えるいかなる詩も推薦することはできない。」と述べたとされる [Wilkending 1979: 826]。
 - 11) Schmid, Christoph von (1768–1854). ミュンヘンの作家、教員。
 - 12) 『守護者』はハンブルク教員組合新聞 “Pädagogische Reform” 紙などに同封し配布されていた。
 - 13) この原則確定によってハンブルクの委員会と愛国主義的宗教的心情をもつ他の児童書委員会との対立が一応解決したという見解もある [Wilkending 1980: 223]。
 - 14) Scheel, Johan Jakob (1855–1918). ハンブルクの教員。著作に『ハンブルク民衆学校教員組合史』[“Geschichte des Vereins Hamburger Volksschullehrer”] (共著)。
 - 15) 愛国協会も、このような「正しい傾向」と「偽の傾向」の議論をもちこんでいる点では児童書委員会と共通している。しかしその正偽の理解が異なっている。愛国協会にとって正しい傾向とは「子どもの感情の健全なリアリズム」[PG 1899] であり、拒絶すべき傾向とはそれに矛盾するものである。
 - 16) 「強制的美学」については、[吉本 2011]。
 - 17) ヴォルガストは享受能力が年齢段階的に発達すると考え、児童から俗悪文学を除去し保護的に教育することによって、民衆学校上級の12歳頃からはある程度自立して読書ができるぐらい享受能力が形成されると考えていた。そのため私的読書の抑制も12歳頃までとされた。
 - 18) ヴィルケンディングによれば、芸術教育運動において「子どもらしさ」を重視することは、子どものディレクタントな享受を要求することであり、ヴォルガストも「子どもらしさ」重視に転換してから享受能力育成重視から転換したという [Wilkending 1980]。芸術教育、とりわけ読書教育における「子どもらしさ」の概念と “Vom Kinde aus” の視点については別稿の検討課題としたい。
 - 19) Rosegger, Peter (1843–1918). オーストリアの作家。“*Als Ich noch der Waldbauernbub war*” (1900–02) など。
 - 20) 「コガネムシの成長を劇の形式で表現する」例 [EJ: 21] はおかしいという『惨状』におけるヴォルガストの例えは説得的だが、歴史的な物語などは良い傾向をもつか悪い傾向をもつか判断しにくい。だからこそ、やはり「傾向批判」は批判を浴びやすい。